

京都市地域・多文化交流 ネットワークサロン通信

発行日 2018年6月30日 編集・発行 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン 第26号

「川でつながる」マダンが動き出しています！

東九条マダンは、1993年に多くの在日韓国・朝鮮人と日本人が共に暮らすまち、京都市南区東九条で地域のまつりとなることを目指して始まりました。「マダン」とは「ひろば」を意味します。様々な立場、ルーツ、心身の状態、そしていろんな思いを持つ人々が、違いを受け入れながら、ありのままの自分を表現し、新しい自分を見つけていく場。そんな「みんなのまつり」を毎年つくり続けています。

上記の紹介文は、東九条マダンのリーフレットをつくる際、一人の若者が呼びかけ、年齢も立場も異なる東九条内外の人たちが集まり話し合っただけの言葉です。この作業こそマダンだといえるでしょう。マダン当日は、総勢100名近い大人と子どもが韓国朝鮮の打楽器を打ち鳴らすプムルノリ（農楽）や、観客が囲む円形空間で演じられるマダン劇、和太鼓と韓国朝鮮打楽器とのセッション、賛助出演者のパフォーマンス、誰でも参加できるシルム（朝鮮相撲）や遊びコーナー、展示、出店など、目一杯の企画が並びます。

マダンが開催される東九条は戦前戦後を通じて多くの在日韓国朝鮮人や生活困窮者を包摂した地域で、今も独特の生活文化が息づいています。例えば、チュソク（秋夕）と呼ばれる陰曆の中秋節の朝、東九条の道端で、先祖を祀るチエサ（祭祀）の供え物を見かけます（祭祀の終わりには、少しずつちぎった供え物を家の前などに撒く）。高瀬川のガードレール脇の、ゴミと間違ふような供え物ですが、しっかりと天に向けられ、この世界と天をつなぐその光景に、私は遠い昔の異空間にタイムスリップしたような感覚を覚えます。そして同時に、この地に朝鮮半島の文化が根付くようになった長い長い時間の流れを感じ、そこに暮らす人たちが東九条で共に営んできた尊い歩み、自分とつながる生きた歴史を感じます。

今年のマダンは東九条の隣、崇仁地域で開催します。かつて在日を含む多くの人たちが、生活の場を求めて、鴨川縁（かもがわべり）の一角で暮らしはじめました。須原通りでつながる地域、高瀬川でつながる地域に、いつしか行政区の線が引かれ、東九条と崇仁とに分かれていきました。でも、今も二つの地域は川でつながっています。そのことを再発見できるマダンです。だって、すでに私たちはたくさんの方たちと出会い、つながっています。崇仁の生活や文化が息づく今年のマダンを楽しみにしてください。（東九条マダン実行委員長 ^{やん} 梁 ^{そる} 説）



梁説さんが脚本を手がけるマダン劇の一場面

東九条を知る学習会「東九条の歴史～4ヶ町編」(3/2) 報告 第2弾

講師：叶 信治さん(希望の家カトリック保育園園長)

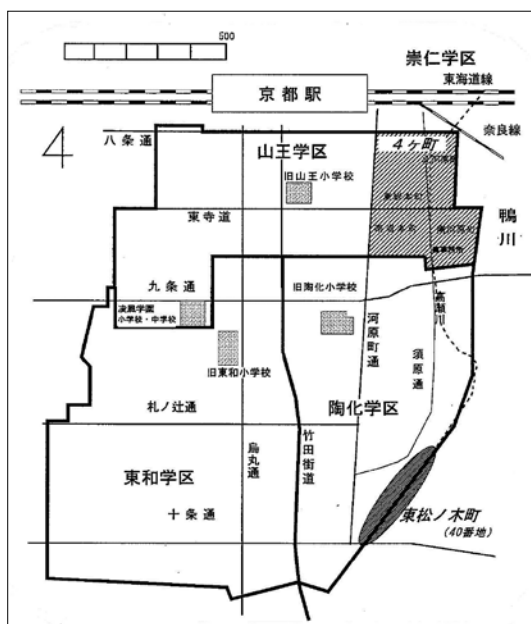
今、東九条は「京都駅東南部エリア活性化方針」の査定に伴い、まちと芸術が会うとりくみが進められています。私たちは、まちの未来に期待しつつ、歴史を受け継いでいくことも大切にしていこうと学習会を行いました。

ネットワークサロン通信25号では、「東九条の歴史～4ヶ町編」第1弾として、ネットワークサロンを運営している希望の家の歴史について掲載しました。今回は、希望の家がある地域4ヶ町(東岩本町・南岩本町・北河原町・南河原町)の歴史について、叶信治さんが話された内容をまとめて掲載しています。

私はここに来ているみなさんに5年後、あるいは10年後に、東九条の語り部になっていただきたいなあ、と本気で思っています。今日は、暗い話をいっぱいしますが、私は闇の中でしか光は明らかにならないと思っています。きれいな福祉とか多文化共生とか共に生きるとか、そんなのは絶対に嘘っぱちです。すぐ吹っ飛びます。ほんとに苦しみの中で、悲しみの中で、闇の中で見た光、そこで持った希望というのが、私は本物だと思います。「負の歴史」「負の世界」を見つめないと真実は見えない、そういう思いで話します。

(図1) 京都駅の東部から北にかけて(まもなく京都市立芸大が移転してくる)崇仁地域があります。今日お話しするのは、その南隣、東九条の方の八条通から九条通にかけて、河原町通から鴨川にかけての4ヶ町の話を中心にします。河原町から竹田街道の間、八条から九条のエリアと4ヶ町を含めて、「京都駅東南部エリア」といって京都市が活性化方針を決めたエリアになります。

(図2) 紫色のところが、昔の老朽危険住宅が密集していたところを京都市が買収して、そこに住んでいた人たちに、市営住宅に移ってもらったりして、今は空き地になっている、住宅市街地総合整備事業(住市総)で京都市が買収しているところです。国から補助金をもらって京都市が手に入れたところです。水色のところは、それ以外のルートで京都市が持っているところです。このエリアが、空き地ばかりやと言われ、デメリットではあるんですが、これから土地を使ってどんなことが出来るか、というひとつの可能性にもなっている空き地になります。東九条の歴史はほぼ20世紀の100年間に作られていったところです。富国強兵、植民地支配、抑圧や差別排外の歴史、嵐が吹き荒れた20世紀でした。その話をしたいと思います。

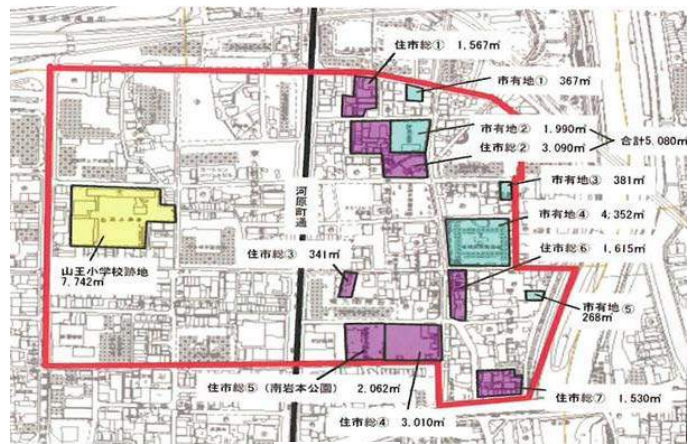


(図1)

京都市が買収しているところです。国から補助金をもらって京都市が手に入れたところです。水色のところは、それ以外のルートで京都市が持っているところです。このエリアが、空き地ばかりやと言われ、デメリットではあるんですが、これから土地を使ってどんなことが出来るか、というひとつの可能性にもなっている空き地になります。東九条の歴史はほぼ20世紀の100年間に作られていったところです。富国強兵、植民地支配、抑圧や差別排外の歴史、嵐が吹き荒れた20世紀でした。その話をしたいと思います。

1889年、明治になって間もなく、東九条はほとんど畑でした。

た。東九条村という昔からある村があって、その周辺には家がありましたが、今では有名になった九条ネギがたくさん栽培されていたということです。明治になり富国強兵の政策がすすめられ、侵略の歴史、1895年に台湾が植民地支配されて、1910年、大韓民国が植民地支配されていく、そして中国、東南アジアに侵略がすすめられていて戦争になる、そして1945年を迎える。



(図2)

その時代背景の中で、1924年、協助会館という朝鮮人に対する宿泊施設が東九条につくられたんですね。職業紹介や人事相談、投産練習、貯蓄奨励、医療関係、災難にあった時の救済などの事業も行った、ということは、1924年にどれだけこの地域に在日朝鮮人がたくさん住んでいたかということです。1925年に、岩本町でこの会館が竣工してその4年後、1929年11月に朝鮮基督教京都南部教会（今の在日大韓基督教京都南部教会）がこの協助会館で設立されています。この教会は1940年代に、朝鮮語で礼拝をしたということで、日本の権力によって潰されます。高ばし（九条大橋）が作られるのが1933年ですが、この橋の建設に東九条に住み始めた人たちが従事しました。鉄道もたくさん増えていきます。複々線化になっていく工事や、山科に抜けるトンネルを作る工事など大型の工事のために、人々が動員されました。

協助会館が出来て、約10年後、1935年、市内在住朝鮮出身者に関する調査が京都市によって行われています。それだけ在日朝鮮人の生活が厳しい状況に置かれていたということです。東九条と崇仁の部分だけを抜きますと、やはり京都市内でかなり多いんです。東九条岩本町で在日朝鮮人の人口が564人。割合にすると30%を超えています。松ノ木町は312名、23.8%です。柳の下町が15.5%、東七条（崇仁）の川端町は215人、16.9%、東之町は85人の5.5%。部落の中と周辺に在日朝鮮人が居住していたんです。そこにはどんな歴史があったんでしょうか。その他の被差別部落にも多数朝鮮人が居住していたということが、この時の調査でわかります。こうして東九条にも多数の在日朝鮮人が住むようになったわけです。

一方では、こういう新聞記事があります。「京都の玄関を汚す鮮人（昔の朝鮮人の蔑称）小屋を撤去。東海道線鴨川栈橋の南へかけ渡邊七條署長の英断」。人が住んでいる小屋を潰すのが、警察署長の英断と称えるひどい新聞記事です。「全世界に鳴り響いた『遊覧都市キョウト』の大玄関



口京都駅前の美観を傷つけるごときものがのさばっているのは問題にならん…。今回、満州国皇帝の京都ご来訪を目前に控えて、鴨川西岸、奈良線鉄橋に横たわる鮮人小屋撤去の方針を決定、三日までに撤去すべし」4月2日の新聞です。無茶苦茶なことが、まるですごい良いことをやったかのごとく語られた新聞記事です。こんなことを言ったり行ったりするのも、私たち日本社会の、また人間の現実です。過去のことと葬り去るのではなく、私たちの記憶の中心に留めるべきです。そうでなければ、私たちは同じことを繰り返します。

1945年に日本は敗戦を迎えます。そして、少しずつ東九条は住民が増えていく、仕事があるということで、人々が集まってきて、在日朝鮮人もその中にたくさんいました。そして、戦後はさらにやみ市ができ、バラックが急増していった、それが強制撤去されていくという歴史があります。

1950年代の動きを少し見たいと思います。崇仁地区疎開跡整備事業という資料が残っています。「1954年2月18日、84戸近く強制撤去」京都駅南バタ屋さん（段ボールを集めて売る仕事）のバラックが84戸くらいあったんですね。「観光京都の玄関国鉄京都駅の南側約3000坪の疎開跡空地は、現在バタ屋さんたちのバラックが84戸建ち、150世帯が住んでいるので、近くこれらのバラックを強制撤去する。これにともない撤去を受けて直ちに住む場所のない人々のため市民生局では下京区東七条西ノ町（八条通のすぐ北側）の市有地に仮設共同住宅を建設、一時収容することを決定した。」という新聞記事です。

1957年には、国鉄沿線バラック集落の実態調査というのをやります。1959年、京都市は南部バラック対策に予算を計上。そして、1962年、京都市が新幹線拡張に伴い北河原市営住宅を東九条北河原町に竣工します。地元ではマンモス団地と呼んでいましたが、そのマンモス団地が老朽化して、このネットワークサロンの上に引越してきたのが6年前です。この時に、東九条に移り住んできた人たちが、今ここに住んでいる、ということです。だから、崇仁と東九条というのは、本当に兄弟みたいなつながりが、昔からあります。八条通で線を引いて、下京区、南区という分け方をしたのが、生活の実態からはそぐわない行政的な線引きだったともいえます。

(図3) 1950年代のバラックの実態調査の一部分です。よく実態を表しているのを見ていきたいと思います。



2011年頃、解体前の北河原市営住宅
通称「マンモス団地」

「戦災を受けた都市には、戦後極度の住宅難のためいくつかのバラック集落ができ、それがだんだん拡張して大きな集落をつくり、各都市共にそれぞれこの対策に悩んでいる。京都市は、1952年頃より京都駅に近い国道沿線南部周辺に急に増え新しいスラムを形成しはじめた。この地域は同和地区として、その環境の改善を図るため、予て不良住宅改良事業や都市計画事業を計画し、1953年よりバラック住宅などの立退き、1955年からは改良住宅の建設

を進めてきたのである。」日本全国が、都市部が焼け野原になった中で、住宅問題が全国的に課題だったんです。その中で京都は京都駅すぐ近くに崇仁地域があって、そこにバラックが沢山できて、対策をすすめないといけない、ということですすめていった。「しかし、このバラック住宅は、年毎に増加し、今までの計画では十分な改良をすることがなかなか難しいようになってきたので、根本的な対策を立てるため、このバラック集落の実態調査を行ったのである。」その時の本建築住宅は71戸に対して、バラック住宅は411戸、圧倒的にバラックに住んでいる人たちが多かったんです。615世帯、1849人ということです。住宅の数より世帯の数が多いということは、一つの住宅に複数の世帯が住んでいることも珍しくなかった。その時の調査で、市内出身の人が30%、近畿出身が21%、近畿以外が29%、そして朝鮮半島出身の人が13.9%という数字になっています。

市	内	170	33.3%
近	畿	110	21.6%
近	畿以外	149	29.2%
朝	鮮	71	13.9%
不	明	10	2.0%
計		510	100%

図3

いろんな生活課題が重なっているんです。経済的な問題、教育の問題、仕事の問題、衛生の問題、病気の問題。一本のタオルを家族みんなで使うわけですから、さまざまな感染症がこの地域の中に蔓延していくことは、当然考えられることです。



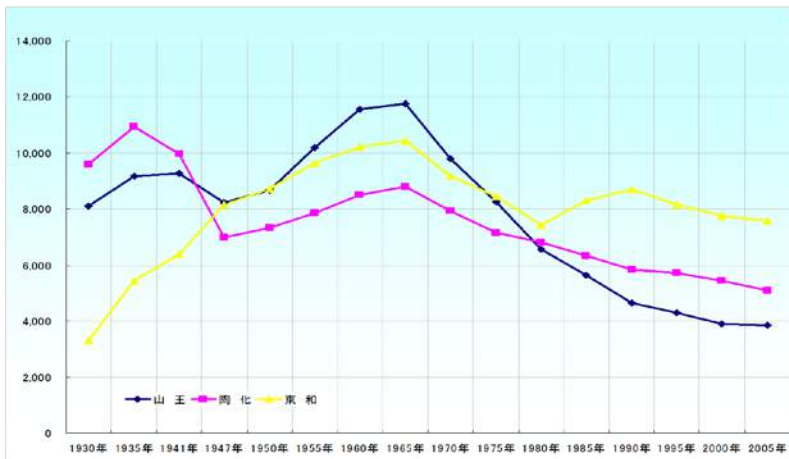
1950~1960年代
高瀬川の中に柱をたて家を建てている



鴨川沿いの堤防の上に作られた住宅



須原通り沿い



戦前から戦後の人口推移

朝鮮半島からたくさんの人たちが東九条に来ました。山王と陶化は日本の敗戦後、一旦人口が減った後、どんどん増えていきます。そして人口のピークを迎えるのが1965年。ここから急速に人口が減っていきます。一番人口の減り方が激しいのが山王学区です。1967年に10回の朝日新聞の連載記事が出ます。その中身を見たいと思います。

〈たがい違いに寝る 人も道具もぎっしり〉 1967年9月19日 朝日新聞

東九条はトタンと、ベニヤと、廃材を寄せ集めて建てたバラックの密集地だ。火災に限らない、教育、衛生、老人福祉—ここにはなんと問題の多いことだ。京都市はこれまで一度も真剣に取り組んだことはなかった。行政がこんなにも打つ手に事欠いた地帯はない。いつまで放っておくのだろうか。Aさん(44)は東岩本町に住む。家族は、夫(46)、長女(22)次女(21)長男(16)次男(14)計6人。4畳半一間。東九条では決して珍しいことではない。便所は8軒共同。

その時、4ヶ町の東側(北・南河原町)には570世帯、4ヶ町の西側(東・南岩本町)には706世帯。竹田街道と河原町通の間や九条通以南にも、同じ状況が散在していた。陶化橋(十条)の北(東松ノ木町、元40番地)では約300世帯が住んでいた、ということです。

〈病気や失業で転落 明るさを忘れた=表情=〉 1967年9月20日 朝日新聞

高瀬川のそばに住む老人(66)は福井県出身、13の年、京都市内の友ぜん工場に勤める。が、10年前、40余年勤めたその工場が閉鎖になって、ここへ来た。肝臓が悪く、妻もノイローゼ気味。医療券で医師に通う。実の子は死に、養女は数年前家を出て行方がわからない。「下の子がまだ3ヶ月のときや。市から月々2000円の乳代をもらってたが主人がみんな、パチンコですってもたんだ。子どもはおなかすいて泣く。隣とはベニヤ板の壁だけやから、泣声が近所にもつつ抜け、『寝られへん』とどなられる。その上、パチンコ代に使ったのが市にわかって、乳代を止める、と言われた。そこで『この子をもっと、ええ人にもろてもろたら』と思って、京都駅裏の陸橋に置きましたんや。ところが巡査にみつかりましたな。それから市に泣きついて、乳代を続けてもらいました。でも主人は小児マヒで足が悪い。気の毒な人やった。いっしょにバタ車をひいていましたが、体が不自由なうえ、こんなことがあって気がむしゃくしゃしたか、それから家を飛出してしまたんです。その子がもう6年生。『かあちゃん、こんなところにいるの、かなわんわ。学校へいっても恥ずかしい。はよ、出ていこうな』といいますねん。子どもに言われるのはよによりつろうおます。」住民たちに、東九条へ住みつけた動機を聞くと、病気や企業閉鎖に抗しきれなかった人が目立った。

<タバコもばら売り 災害・不況のたびに集まる> 1967年9月23日 朝日新聞

東九条の魅力は、そこに行けば「なんとか、食える」ことにある。戦後20数年、災害や不況の襲うたびに、あるいは、一家の働き手が病気で倒れるなど災害、不幸の起るたびに、一家族一家族と、少しずつ人を吸い込み、いつの間にかいまのようにふくれあがった。戦前、この地域はねぎの特産地だった。京都市農政課は「九条ネギ」として、いまでも京都の特産野菜の一つにあげる。農政課の話によると、明治の初め、すでに150ヘクタールのネギ畑が、ここにあった。(戦後も桑畑にまじってネギ畑が残っていた)しかし、京都駅裏、いまの新幹線八条口付近でヤミ市が繁盛しはじめると、みるみるその表情を変えていった。京都駅を間近にして、地の利がある。食い詰めた人たちが、次から次とここに居つきだした。さらに、この地域の隣、東海道線の北側からもあふれた住民がここに居を移してきた。こうして、ネギ畑は急速に長屋や小屋の密集地へと変わっていった。

今ではブランドの九条ネギ。この地域ではほとんど見られなくなりましたが、昔は九条ネギの産地だったんです。

もう一つは火災の歴史があります。1960年代から80年代、大きな火災が繰り返し起こります。1964年南河原町で1100㎡23世帯139人、その2年後東岩本町で71世帯211人が被災して住まいをなくしています。1967年北河原町1200㎡死者2名121世帯307人が被災して、おそらくこれが最大の火災だと思います。

1976年には、数か月を置いて99世帯162人、16世帯18人の人たちが被災をして、この時に新聞記事にもありますが、76年の火災で行き場をなくした方たちの緊急避難場所が旧希望の家のホールになっています。「家族は一飛ぶ絶叫 アパート大火 寝間着姿でぼう然」とその時のことが書かれています。

1989年、ずっと後の時代になりますが、この地域に地上げが襲ってきた時に起こった火災で、私たちはてっきり付け火だと思ったんですけど、そうではありませんでした。「足の不自由な老女 焼死」「火災被害者多い東九条 10年間に死傷20人 住民高齢化 アパート老朽」これが1990年の新聞記事です。

東九条では、今まで話したような時代背景がありますので、生活保護の受給者は非常に多いです。外国籍、在日コリアンの人たちは、同じように働いていたのに年金制度から除外されてきた。日本の国民皆年金制度、皆保険制度ができたのが1950年代末。



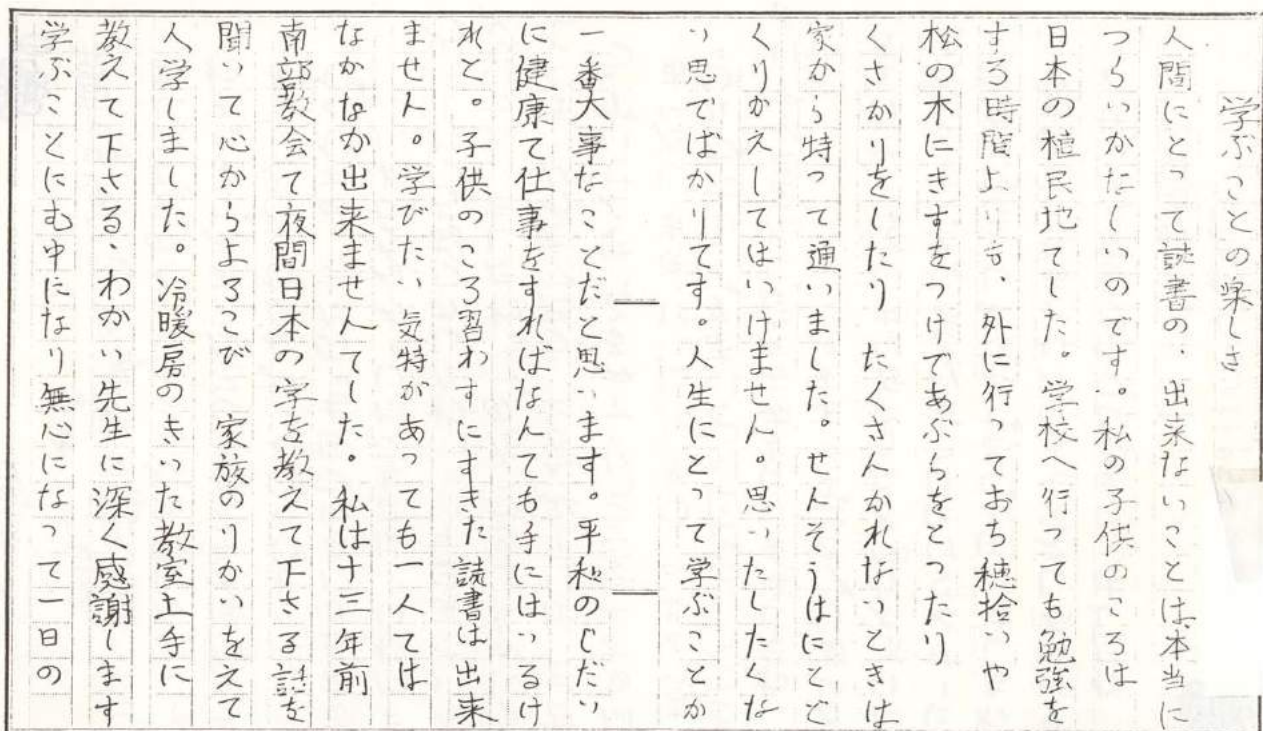


1960年代からはみんなが年金と保険に入れる仕組みが出来たけれども、そこには国籍条項があって外国籍の人たちは外されたんです。年老いて老齢年金をもらえずに、生活保護に頼らざるを得ない、ということで、生活保護を受給している人たちが多いです。昔はたまごをもらってたまたま家に置いていただけでも、ケースワーカーから厳しく責められるということもあり

ました。4人の子どもを連れて、何度も川へ飛び込もうとした、という話もあります。

この人は在日1世のハルモニで、昔、学校のプールをつるはしとスコップで掘って作っていたんですね。その仕事に従事していた方の指は、このように変形をして、高齡期になって不自由な生活をしておられます。

字の読み書きができない1世の特に女性たちが、東九条にはたくさんおられて、オモニハッキョ（お母さん学校）が、在日大韓基督教京都南部教会で1970年代末に開始されます。私も含め、たくさんの青年たちが参加し、オモニたちから歴史を教わり、オモニたちの本当の歴史、生活の厳しさを教えてもらいました。50代、60代になった方たちが、初めて鉛筆を持って、あいうえおどころか線を引くところから始めたんです。みんな、昼間の仕事を終えて、家に帰って夕飯の支度をして、月曜日の7時半に南部教会に集まってこられました。



オモニの作文

第7回東九条春まつり展示より

京都市にこの地域のことを改善するように、住民の運動が激しくなっていきます。1960年代に京都市は東九条の実態調査を行います。その時の予備調査の報告で京都市長はこのように言っています。「東九条住民の生活上の実態は、憲法に規定する基本的人権並びに社会福祉に関わる重要な社会問題である。」憲法25条「すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」に違反する実態が東九条にあるということを、京都市自らまとめて、東九条の改善を約束するんですが、ほとんど何も進みませんでした。

1973年に「生活館」が京都市民生局の出先機関として作られました。旧希望の家のすぐ横に作られました。この生活館が今日のネットワークサロン事業に引き継がれています。1978年には、子どもたちがわんさかいましたので、「山王保育所（乳児）」が建設されます。1982年にとても急な階段を上らないと入れない「老人福祉センター」が生活館2階にできます。住宅の問題をはじめとした、生活課題の根本を解決していくような取り組みは何もなされないままで、1980年代を迎えます。

1980年代、京都市により、もう一度実態調査が行われ、東九条福祉地域（4ヶ町）の改善をするための「中長期計画案」が発表されます。その直後1989年に地上げが

この地域を襲ってきます。4ヶ町の中で希望の家が建っているすぐ近くと、南河原町に大きな地上げ、その他にもいくつかありましたけれど、苦勞してきて今までがんばってきたのに、住むことすらできない、いつトラックにつっこまれるか、火をつけられるかわからない、そういう危機感の中で「東九条を守る会」を結成し、「東九条改善対策委員会」を再出発させて、京都市に4000名の署名を提出しました。その頃に、今でも続いている夏まつりやもちつき大会が再開され、ここから新しいまちづくりが始まってきました。

1990年代のことです。1995年、最初にできあがったのが、東九条のぞみの園、その上に市営住宅が作られ、一部シルバーハウジング（高齢者向け住宅）が作られました。4ヶ町の中の一部の人たちがその市営住宅に移つ



て、空いたところに次の市営住宅を建てて、次の人たちが入居をして、この地域の危険な住宅を撤去して安心して住める地域にしていこう、と進められてきました。

東九条のぞみの園、河原町通にある南岩本市営住宅、高瀬川南市営住宅が作られていきました。2017年の12月に初めて高瀬川市営住宅でもちつきをしました。団地の住民さんだけでなく、これからいろいろ地域のために活用していきたい、と町内会長さんは言っています。旧マンモスの人たちが住んでいるネットワークサロンの上の東岩本市営住宅ができ、その跡空きがたくさん残っています。これを どういう風にしていこうかということが、今後のまちづくりの大きな課題です。

私が勤める希望の家カトリック保育園では、1980年代から「共に生きるよろこび」を理念として、「多文化共生保育」に取り組んできました。私たちのこの地域が、今まで話してきたようないろんな苦しみや悲しみにぶつかり、コリアンをはじめ民族や部落への差別や偏見にぶつかってきました。様々なハンディを持った方たちもたくさんいました。いろんな背景を持った方たち、ルーツを持った人が共に生きるってどうしたらいいんだろう、

綺麗ごとでは先に進めない、そういう中で、保育園では子どもたちがいろんな国の民族の文化、ことばや、料理や衣装、踊りを楽しんだり学んだり、そういった取り組みをしてきました。保育園以外にも、児童館やオモニハッキョ、ハンマダンなど、いろんなところが、この共に生きるということをテーマに取り組んできて、東九条マダンという大きなおまつりに結びついていったというのが、1980～1990年代の動きです。今では5～6000人の人たちが、この東九条マダンに集まってきます。



もちつき大会 in 高瀬川南市営住宅



希望の家カトリック保育園の子どもたちが参加する
東九条マダンの「くす玉わり」

京都市立芸大の崇仁移転が決定し、京都陽東南部エリア活性化方針が策定された今日、芸術、アートの関係、音楽の関係の方たちが、この町と新しく関わりを持っています。「どうなるのかな」と数年前までは不安でしたが、この一年間、芸術家の人たちとつながって、「おもしろいな」と希望が持てる気持ちになってきています。地元は、この地域で今まで苦労しながらがんばってきた人たち、昔のことを

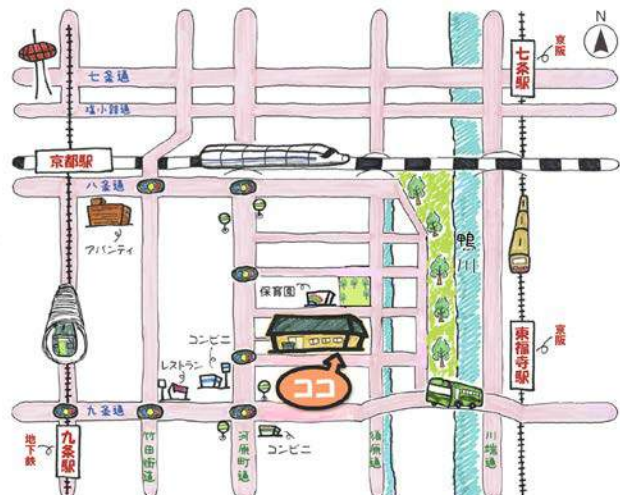
よく知っている人がたくさんいます。人間のつながりもいっぱいあります。魅力的な地域です。そのことを大事にしてほしい。ほとんどの人たちが、これから来る人たちにそれを望んでいると思います。それと同時に、今まで頑張ってきたらきたほど保守的になる、これは世の常です。一方、芸術家の方たちは、地域のことは知らないけれど、新しい風を吹かせてくれて、新しいつながりを広げてくれます。両者がどうつながり、共に汗をかいてさらに魅力あるまちを作っていけるか、私はすごく期待をしています。これからのまちづくりを共に考えていきたいなと思っています。(叶 信治)



2017年 東九条地域・多文化交流夏まつりにて。子どもたちとジェンカを踊る叶信治さん。

京都市地域・多文化交流 ネットワークサロンの地図

下記のURLから、携帯に取り込むことができます。
みなさん、ご利用くださいね!!



第7回東九条春まつり報告!!

2018年4月21日(土) ネットワークセンターにて、第7回東九条春まつりが開催されました。



6年間実行委員長を務めてくださった矢吹文敏さんから、小林栄一実行委員長へバトンタッチ!!



今年のトークショー「芸術と東九条の出会い」。あごうさとしさん、岡永遠さん、倉田翠さん、きたまりさん。この1年、東九条と新たな芸術をつなげてくださったみなさんが登壇してくださいました。東九条からは、村木美都子さん。



今年初めて、「凌風学区子育てステーションネットワーク会議」から、地域の保育園や児童館の子どもたちの作品が展示されました。



「いきいき ふれあいの輪っ!!」初めて、京都朝鮮中高級学校のみなさんが出演してくださいました。国際学園のみなさんと共に、会場を魅了しました。スター東野(?)旦も登場!! 今年も高齢者さんたちの♥をつかみましたよ。



暑い中、たくさんの方々が来てくださいました。春まつりに協力してくださいましたみなさま、本当にありがとうございました。



□ 所在地: 〒601-8006 京都市南区東九条東岩本町31 (京都市地域・多文化交流ネットワークセンター内)

□ TEL: 075-671-0108 □ FAX: 075-691-7471 □ E-Mail: info@kyotonetworksalon.jp

□ 開館時間: 9時~17時 □ WEBサイト: <http://www.kyotonetworksalon.jp>

□ JR 京都駅八条口・京阪東福寺駅・市営地下鉄九条駅より徒歩15分

京都市バス 42・202・207・208系統 九条河原町より徒歩10分/84系統 河原町東寺道より徒歩1分